

磯根漁場の包括的管理による生産性向上研究

(予算区分 研究費 研究期間 平成 29~31 年度)

担当 : 水産技術研究所伊豆分場 長谷川雅俊

【研究の背景とねらい】

伊豆地域では磯根漁業が長年継続されてきましたが、漁獲量や漁業従事者の減少、磯焼け、テングサ漁場の荒廃などの自然環境の変化に伴い、新しい磯根漁業の構築が求められています。本研究では、新しい磯根漁業の構築に向け、荒廃したテングサ漁場の回復手段として雑藻刈りを改良すること、アワビ資源の再生産効率を高める手法を確立すること、テングサ・アワビ漁場の配置と利用方法を検討することにより、個々の漁場の生産性向上、漁場の適正配置による包括的な地先海面の生産性向上を目標とします。

【これまでに得られた成果】(平成 30 年度の成果)

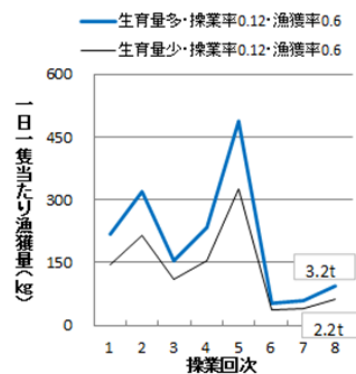
- 平成 29 年度に下田市白浜地区の素潜り漁業者と協働して、雑藻刈りに移殖、母藻投入、食害防除を組合せた試験区を設定しました。平成 30 年度に素潜り漁業者の操業が行われ、テングサ約 400kg/800 m²が漁獲され、効果が確認されました。



雑藻刈り前



雑藻刈り後



操業モデルによる漁業の再現

- アワビの再生産効率向上のために、実験的に漁場の親貝密度を 3~4 倍に高め、それによる加入量を評価したところ、過去 7 年間では中位の加入量と推定されました。
- テングサ生長、漁場と操業の面積割合 (操業率)、漁獲率を要因とした潜水漁業者のテングサ操業モデルを作成しました。その結果、現存量低下時期は漁期始めの生育状況に依存し、現存量低下時期を遅らせるには操業率や漁獲率を低くすることが有効と考えられました。また、隻数増加には漁場拡大が必要であることもわかりました。

【期待される成果】

- 地区としての磯根漁業ビジネスモデルが提案でき、磯根漁業の存続とともに若者の漁業への就労促進や磯根漁業生産物の安定供給が見込まれます。
- 磯根漁業の再生により、漁業生産額の増加とともに伊豆地域の活性化が期待されます。

【今後の計画】

- 雑藻刈り改良試験を平成 30 年度も漁業者と協働で行っており、試験区で漁業者による実操業を予定しています。
- アワビ親貝の高密度化による再生産効率向上試験では、晩春から初夏に加入量を調査します。
- 漁場のゾーニングの試行では、漁業者と協働による雑藻刈りでテングサ漁場の拡大を検討するとともに、アワビ漁場での親貝場と稚貝場の配置について検討します。

(作成 平成 31 年 4 月)